

〈ビートルズの音楽について〉

ビートルズといえば、1962年にデビューし1970年に解散したイギリスのロックバンドです。当時の音楽状況が、1950年代のアメリカンポップス(いわゆるオールディーズ)全盛の時代であったことを考えると、彼らの音楽の斬新さは今では想像もできない位のインパクトがあったものでしょう。何が・・・???

当時のポップスは今聴いても分かるようにかなり甘ったるい感じの音楽ではなかったのでしょうか。そのこと背景として最も特徴的なことはコードの使い方が大きく異なっていたということです。それまでの音楽の多くは、diatonic パターンのなかで解決していた音楽でした。“次の展開が読めすぎる”ものが主流であり、心地良いけど何かテンション感(スパイス)の足りない音楽であったといえます。よくビートルズのような音楽を“ねじれポップ”などと称されますが、この“ねじれ”というのは、non-diatonic 進行に伴う一時的な転調を感覚的に示す言葉であるといえます。

ビートルズに関する書籍も書店に行けば山ほど出版されていますが、その内容はグループ内外の人間関係や時代状況における社会的影響などにスポットを当てたものが9割以上を占めているといっても過言ではありません。『評論家は何をしているのだ!』と音楽寄りの筆者などはたまに不愉快な気分になったりしたものです。もちろん、発言や行動、ファッションなど、ユニークな要素は多々あるものの最も本質的な事柄(=音楽)には、周囲はなかなか到達していなかったと言わざるを得ません。例えばその後(1970年代以降)の音楽状況を振り返ってみてもビートルズの冒険が流行音楽の血や肉となるのはずいぶん後のことでした。日本においても、ブルースやジャズなどの影響でやや複雑化していた昭和歌謡は、一気に diatonic な演歌やフォークの世界へ下降しつつ身を投じるといった状況(もちろんそういう音楽も筆者は大好きだったりします)となりました。

ビートルズ音楽のキモは、①それまでのポップスにはなかったコード進行、②そのコード感のなかで非和声音(コード構成に無い音)を感じる力(=例えばCコードでレ、ファ、ラなどを歌う)、とそれらを背景とした③ビートル感、という3点に集約されると思います。①は今までもパターンのなかでさんざん述べましたが、いわゆる non-diatonic コードへの連結ということになります。これはクラシック音楽的に解釈すればモード・モーションにあたります。ビートルズが最も頻回に用いたものはミクソリディアン・モーション(C→B♭)でした。“Yellow Submarine”の冒頭などはまさにそうです。また、ドリアン・モーション(Am→D7)もよく使いました。“ノルウェイの森”は、Verse 部はミクソリディアンで展開部はドリアンになっています。リディアンも時々用いられていますが、フリジアンやロクニアンにはあまり手を出さなかったようです。その他にはパターン22に示したコード展開(転調の繰り返し)などが挙げられます。ブルースやゴスペルのような黒人音楽からの影響も多く、F→C、といったのアーメン終止も見受けられます。たとえば“Let It Be”の間奏などそんな雰囲気がするのではないのでしょうか?このようにビートルズの音楽は、耳心地良い音楽という前提を守りながら、モード、ブルース、調性、ペントニック、などとの交差点を行ったり来たりしているということがいえるでしょう。いずれにせよ、ビートルズの楽譜を見たり、ギターやピアノでコードを追っていくと“ありきたりの展開は極端に少ない”というのが筆者の感想です。きっと彼らは色々と考えてそうしたというよりも感性の赴くままに楽器を手にして歌ったらそうなったというのが実情であり、それ故、天才だったのだと思います。このように、ビートルズの音楽はすべての現代ポップスの基礎を作ったといえますが、周囲(リスナーも含めて)の多くがそれに追いつくのは本邦では、ワールドミュージックの流行、ミスチル、小室哲哉などが登場した1990年代以降の音楽シーンであったという勝手な印象を筆者は持っています。

今回、提示したビートルズコードは実際、筆者がメロディを付けてみると「どこがビートルズ?」と読者の方は感じられることと思われます。このことに関する言い訳は、“音楽療法的に分かりやすい旋律とした”ということと、②に述べたメロディを感じる力が筆者にはなかったと言わざるを得ません。ちなみに③で取り上げたビートル感、すべてのパターンのなかで皆様が工夫されれば良いと思います。